「ポジティブループ」形成のための学校ホームページの活用
－ホームページ運用活性化の実践とその成果－

藤岡市立東中学校　教諭　一場　喜久雄

１．はじめに

学校が信頼を集め、児童・生徒の学びがいっそう成果を上げるためには、家庭や地域の理解と協力が欠かせない。そのためには、保護者や地域住民に対して、学校の教育活動について積極的に発信・広報していくことが求められる。この点について、文部科学省は「学校評価ガイドライン（平成 22 年改訂版）」の中で「学校の情報の提供は自らの良さや努力、また取り組みたいと考えている事柄を外に向かってアピールし、あるいは抱えている課題を率直に広く示すことにより、保護者や地域住民等の理解や支援を得ることができる絶好の機会となる」としており、特に学校ホームページについては、「幅広い人々に対して情報を提供することが可能となる」ことや、「人々の多様な関心に対応することができる」ことから、「積極的に利用することが望まれる」としている。また、ホームページの運用については、「掲載する情報が古くならないよう適宜ホームページを更新」することが重要であるとしている[1)]。

こうした背景のもと平成 26 年 3 月現在、全国の小学校の 89.3%、中学校の 88.2%が学校ホームページを開設するに至っている[2)]。また近年、更新作業が比較的手軽な学校版 CMS（content management system）がさかんに導入されたことにより、多くの学校の更新頻度も向上している。しかし、反面、1 年以上更新が見られないような学校も未だに決して少なくなってはいない。こうした状況を「二極化が進んでいる」と分析する研究者もいる[3)]。

本校においても、かつては更新が進まないホームページを開設していたが、平成 24 年度に運用法を見直して以来この 3 年間で、「毎日更新」を達成し、「アクセス数」の急増に象徴される活性化を実現した。また、保護者への意識調査の結果、本校の取り組んだホームページの活性化が、学校に対する印象や評価の安定・向上に役立ったとともに、信頼や協力の獲得にたいへん有効であったことが明らかになった。（以下、「ホームページ」と「Web ページ」を本稿では便宜上混用するが、これらは同義である。）

２．基本的な考え方

そもそも広報とは「ＰＲ（Public Relations）」の邦訳とされる。すなわち、広報の本来的な機能は、情報の一方的な発信ではなく「関係を構築する」ことにある。学校は従来から印刷物を中心にいくつかの広報手段を活用してきているが、学校ホームページは、他の広報手段と違い、保護者等が随時かつ能動的に情報に接することができる点を大きな特徴とする。閲覧者は少なからずの関心をもとに、学校に自ら歩み寄り、広報のきっかけを与えてくれているのである。この好機を活用しない手はない。関心に誠意を示し、期待に応えることは、良好な関係作りにきわめて有効である。さらに、閲覧者の来訪のたびに関心に呼応する新しい情報を提供することによって、信頼が増し協力を引き出すもとになる。同時に、教師にとっては信頼が自信と誇りを呼び起こし、新たな広報への意欲となる。こうして学校理解の良い循環が形作られる。国際大学グローバルコミュニケーションセンター准教授の豊福氏は、この循環のことを「ポジティブループ」（図-1）と呼び、これを機能させることで、

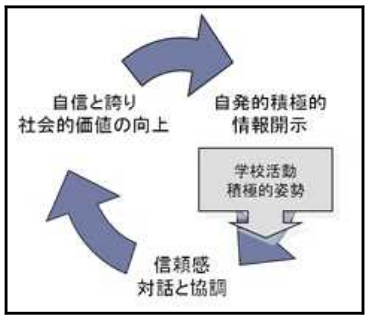


図-1 ポジティブループ

学校単独の努力に加え、社会的な評判や協力を加勢に付けることができるとしている。また、学校ホームページはそのための有力なツールであり、活用は有効であるとしている[4)]。本校では、そうした学校ホームページの持つ機能と価値を再認識し、活性化の必要性を見出したものである。

３．取組の概要

藤岡市教育委員会では、株式会社 EDUCOM の「C4(シーフォース)」を校務支援システムとして導入し、管内の小中学校はすべて C4 上で稼働する CMS によるホームページ運用を開始した。本校では、平成 22 年度から同システムによるホームページの公開を始めた。いわゆるブログ形式を核とするシステムで、基本的にはデザインを選択し定型フォームに文章を入力するだけでページが構成できるので、専門的な知識・技能がなくても制作は容易であるとされる。しかし、初心者に習熟が必要であることはもちろんのこと、知識を有する者にとっても自由度の無さが煩わしさとなり、慣れないとその手軽さを実感できなかった。それゆえ、新しいシステムは当初敬遠され気味で、行事があったときに担当者がその様子を「学校日記」の記事として掲載する程度であり、学校広報の手段としては十分に機能していなかった。

平成 24 年度当初、本校では目指す学校像の一つとして「勢いのある学校」を位置づけた。学校ホームページ運用面においての「勢い」とは、頻繁なページ更新であるととらえた。また、ホームページ閲覧数（アクセス数）が増加すれば「勢い」の象徴となる。そこで、目指す学校像の具現化の一つとして、ホームページの活性化に着手した。

「2.基本的な考え方」で示したとおり、頻繁なページ更新の「勢い」をもとに積極的な情報開示を行い、たくさんのアクセス数を獲得して「勢い」を示すことは、ポジティブループの形成につながる。本校では、「市内一・群馬一のアクセス数を達成しよう」との合い言葉のもとアクセス数アップを目標に掲げ、そのための手段として、「Web ページ更新の勢いは学校の勢い」との合い言葉のもと、頻繁なページ更新を含むホームページの内容の充実を行っていくこととした。取組の全体イメージは図-2 の概念図に示すとおりである。

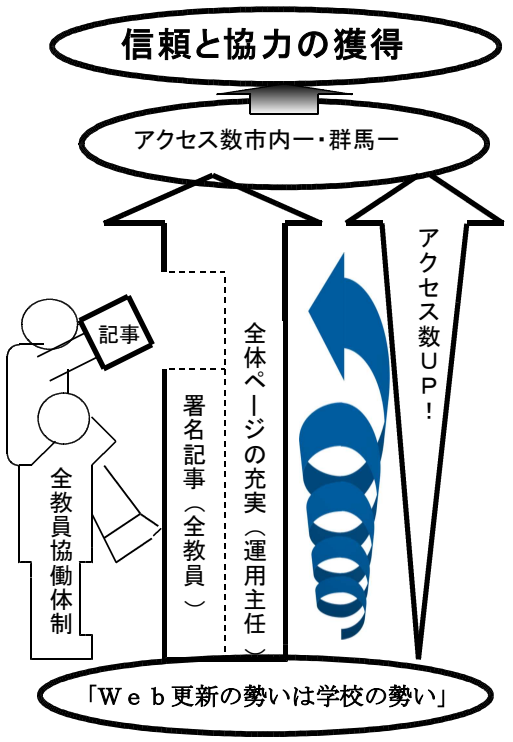


図-2　ホームページ活性化の概念図

４．具体的な実践

（１）　協働体制の構築と整備

「ポジティブループ」を形成し、保護者や地域住民との「関係の構築」を実現すると同時に、効率的にホームページ運用を実現するためには、全職員がホームページ運用に関わることが有効であると考えた。そのために、役割を明らかにすることからスタートした。

まず、ホームページ運用主任は、ページ全

体の構成と、更新があまり必要ではないページの整理・充実を担当し、メインとなる「学校日記」欄に掲載する日々の記事は、一般の教職員の担当とするとの役割分担をした。

図-3 「学校日記」の記事例

（２）「学校日記」欄の充実

日々の出来事を記事にして周知する「学校日記」欄の充実があってはじめて、頻繁な更新が実現できる。当初、以下のような二つのルールをつくり、実践にあたった。

① 記事作成・公開は「日直」の業務

職員がホームページ制作に定期的に関われるように、記事作成・公開は「日直の業務」として位置づけた。

② 記事は「署名記事」

公開される記事に名前が付くことで、職員が記事作成と記事内容の双方への責任を自覚でき、更新が継続できると考えた。そればかりでなく署名記事は、職員総力で情報公開に努めるわれわれの姿勢と、そうした取組を展開する本校の創意工夫・独自性と熱意を示すことになり、学校理解に役立つと考えた。

（３）ホームページ全体の内容の充実と工夫

活性化策のスタートと同時にホームページのリニューアルも実行した。まず、トップページの一面だけで東中が概観でき、必要としている情報にすぐにたどり着けるよう「ポータルサイト」的なレイアウトを施した（図-4）。また、表-1 に示すような工夫をトップページにちりばめた。その他にも、生徒の様々な取組ごとにカテゴリーを作ったり、発表に使ったプレゼンテーション画面をそのまま PDF 化して掲載したりするなど、無理なく内容を充実させ、生徒の活動の周知に役立てた。また、各カテゴリーともできるだけ写真を中心にしてビジュアル化し、一目で学校の雰囲気を感じ取ってもらえるよう心がけた。

1.タイトル	ページデザインを季節や行事によって定期的に変えるが、タイトルロゴもそれにあわせて変更する。第一印象を変え、ページ内容の増補に期待感を持たせる。
2.時事スローガンとスライドショー	行事などにあわせ、スローガン的な短文を掲載し、その時々の学校の雰囲気を伝えるとともに取組の広報をする。写真は、なるべく生き生きした生徒の表情を載せたいが、必要に応じモザイクをかけるなどし、個人情報保護に配慮する。
3.タブ表示	どんなカテゴリーがあるか、一目でわかるようにした。(9月時点で30カテゴリー)
4.アクセスカウンター	累計・月計・日計等データが表示される。「Webページ更新の勢いは学校の勢い」のスローガンもこの欄に掲載し、取組を周知する。
5.AED設置場所案内	社会体育などの機関で施設を利用する外部の方を念頭に、万が一の場合に備え、あらかじめ周知しておく。
6.「学校日記」	全職員が関わる記事の掲載場所は、一番目立つ場所へ配置した。
7.配布物PDF	学校で配布された印刷物のほとんどはここに掲載され、PDFとして取り出せる。
8.本校の特色ある活動	本校の18の取組の概要を掲載。「小中連携」「人権教育の徹底」「態度教育の徹底」「食育の推進」「アルミ缶回収」「読書活動の推進」など。
9.放射線測定値	市環境課が継続している校庭の放射線測定の値を月ごとに掲載。

表-1　東中ホームページ（トップページ）の主な工夫点

図-4　「ポータルサイト」的なレイアウトをした本校トップページ

（４）学校ホームページの発展的活用

①宿泊行事Ｗｅｂ速報

ホームページの大きな特徴の一つに、情報を瞬時に周知できる「速報性(即時性)」がある。この特徴を生かし、修学旅行などの様子を現地から速報する取組をしている(図-5)。本校では年度当初に、個人情報利用について保護者から許諾を得ているが、いっそうの個人情報保護のため、パスワードでアクセス制限をかけ、現地の写真をふんだんに使ったり、保護者からのコメントも書き込める状態にしたりして、臨場感のある双方向的なホームページ活用を実現している。生徒はこの速報をリアルタイムに見ることができないので、事後、このページを拡大印刷して廊下に貼り出し、保護者のコメントを改めて見せて、日頃の会話ではわからない思いやねがいを理解させるなどして、副次的な教育効果も狙った(図-6)。26 年度の修学旅行における実践では、2 泊 3 日の間に 120 件の記事が掲載され、のべ 3000 回のアクセスがあり、コメントも 30 件ほどが投稿された。どの投稿も保護者としての温かなコメントであり、引率教員への感謝も多く寄せられた。

図-5　宿泊行事Ｗｅｂ速報画面

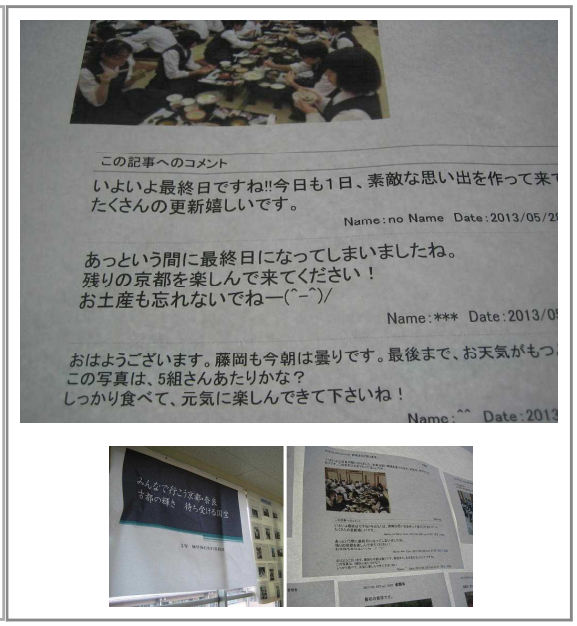


図-6　廊下に貼り出された速報画面

②「学力向上コーディネーター授業参観記」

本校では、「学力向上コーディネーター」が授業参観を行い、指導・助言を行っているが、その際の授業参観記録は、学校日記の記事としてホームページに連載している。授業者本人への還元はもちろん、他の教員や生徒・保護者の目も意識し、学力向上への意識の継続ならびに、学校の学力向上策の周知に役立てている。

③ 災害時の活用を視野に

2014 年 9 月 18 日に、前橋市で震度 5 弱を観測する地震が発生した。本校では、「生徒学校とも無事である」との記事を、ホームページと学校連絡メールを通じて速報した。記録によると地震発生直後 12:50 の日計アクセス数は 278 件であったものが、13：05 で 374 件に伸びた。すなわち 15 分間で 100 件近いアクセスを記録したのである。事後、アンケート調査したところ、地震発生直後に本校ホームページで学校の安否確認を行った保護者は、回答者 340 名中 119 名で 35%であった。今後も、天候の急変や災害等の場合の情報源としての活用をいっそう機能的に行う予定である。

５．取組の成果（数的データを中心に）

「学校日記」の頻繁な更新を中心とした活性化策はすぐに軌道に乗った。各分掌・担当ならではの微に入り細を穿つ視点で、周知したい出来事があれば日直以外でも積極的に記事にする状況が出来上がった。また、校長・教頭も先頭に立って記事を作成した。こうして、様々な職員が関わりながら「学校日記」欄は日々充実して行った。

図-7 「Ｗｅｂ記事作成セット」

2 年目（25 年度）には、各学年の話題が毎日掲載されるように、日直に加えて各学年内で記事作成担当者をローテーションする取組を始めた。そのために各学年にデジタルカメラとカードリーダーを「Ｗｅｂ作成セット」として預け、それらを収納する箱を巡回させて当番を明らかにするようにした（図-７）。

3 年目の本年度は、C4 の機能である「カテゴリー関連づけ」を活用し、作成した記事を、トップページの「学校日記」欄ばかりでなく、各種行事のカテゴリーにも同時掲載し、テーマごとのページの内容も充実できるよう取り組んでいる。

こうした一連の取組の成果は、以下に示すデータに明らかである（表-２）。

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	26年(9月現在)
アクセス件数	30942	52804	191162	270582	170247
件数／月	2578.5	4400.3	15930.2	22548.5	24321.0
件数／日	84.8	144.3	523.7	741.3	864.2
公開ページ平均	16.4	18.7	21.7	30.4	38.9

表-２ 東中学校ホームページ年間アクセス数の推移[5)]

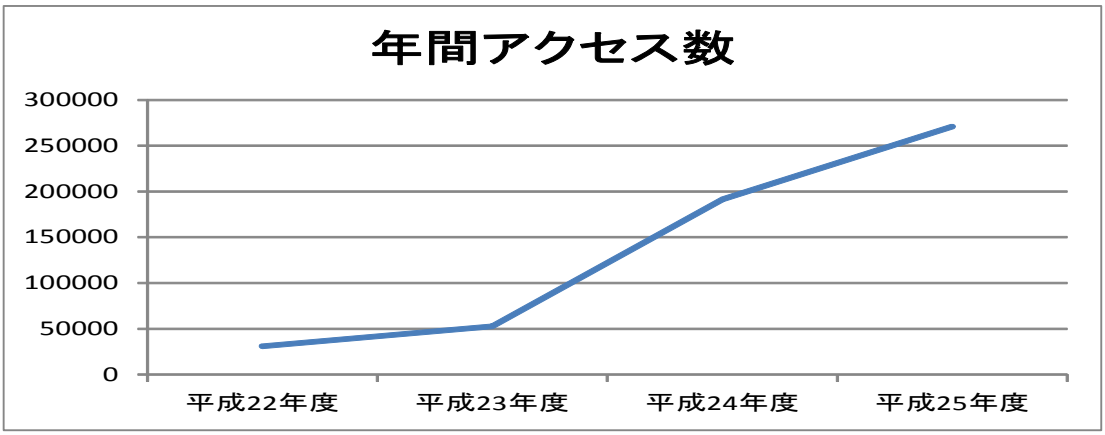


図-8 東中学校ホームページ年間アクセス数の推移

当初目標である「藤岡一のアクセス数」は、平成 25 年度早々に達成し、休日の投稿も含め、1 日平均 6 件の記事がアップロードされ続ける「勢い」のある状況は、24 年度以来現在も続いている。

６．意識調査の分析と考察

（１） 調査概要

① **対象者**　平成 26 年度在籍生徒保護者 460 名

② **調査方法**　無記名質問紙調査

③ **実施時期**　平成 26 年 10 月上旬

④ **質問内容**

1) 本校ホームページの利用実態

2) 本校に対する意識について

⑤ **回答数**

有効回収数 340（回収率約 74 %）

1 年生保護者	2 年生保護者	3 年生保護者
129 名	109 名	102 名
男子生徒の保護者	女子生徒の保護者	
153 名（45 %）	187 名（55 %）	
保護者性別【男性】	保護者性別【女性】	
14 名（4 %）	326 名（96 %）	

表−３　回答者の各比率

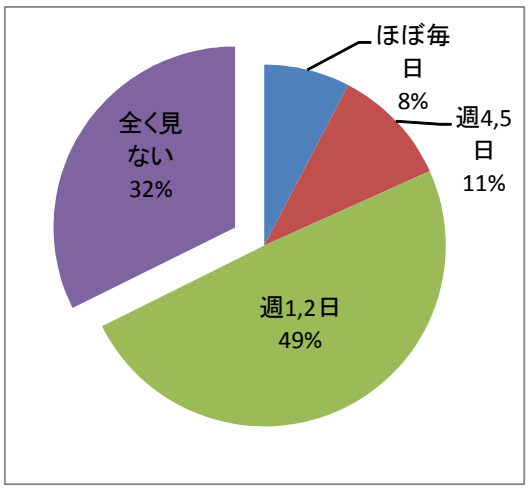
（２） 集計結果の分析と考察

① ホームページ利用の実態

ア ホームページ閲覧の有無と頻度

回答者の 68 %が定期的にホームページを見ており、およそ半数は週 1,2 日のペースで利用をしている（図-9）。また 32 %は全く見ていないと回答しており、その理由として一番多かったのが「インターネットが使える環境にないから」で、28 %であった。

全く見ないと回答した男性（父親）の理由の半数は、「関心がないから」であった。同じく全く見ない女性（母親）の理由は、「インターネット環境がないから」、「ホームページの存在を知らなかった」、「時間がないから」の 3 項目にほぼ等分された。



図−９ 東中ホームページをご覧になりますか

先行研究によると、毎日更新する体制を採った学校は、ホームページを「一度も見たことがない」保護者の割合が大幅に減るもののゼロになるわけではなく、関心や意識の高い保護者が見続ける割合が 60 %程度で安定し、「リピーター」が獲得できるという。この「リピーター」を形成することが、学校ホームページを通した信頼関係の構築にはきわめて有効に働くという [6)]。本校のアンケートデータでは、定期的に「見る」と回答した保護者の割合がおよそ 7 割であり、上記の研究結果を鑑みると、取組が十分に機能し、成果を上げているということが分かる。

イ 閲覧に使用する機器と、見る時間帯

本校ホームページを「見る」と回答した保護者の閲覧の形態について訊ねた。「どんな機器を通じてご覧になりますか」との質問については、「PC・タブレット」（44 %）と「スマートホン・携帯電話」（39 %）がほぼ同数であった。両方を使い分けているという回答が 17 %であった。また、「主にいつご覧になりますか」との質問については、76 %が「夜間」と回答した。

② ホームページに対する意識

ア 情報収集に有効だと考える手段

「東中を知るために役立っていると思うものを選んで下さい（複数回答可）」に対する

回答は図-10 のとおりである。「ホームページ」は、見ない人が 3 割いるため、175 人と回答者全体の 51 %程度にとどまった。

本校では、3 つの学年がそれぞれ学年通信を毎週末に定期的に発行しているが、全体の 72 %にあたる 254 人が役立っていると回答し、学校（学年）からの公式的な連絡物として信頼を集めていることが分かる。また、単発的な内容に限られるが、情報がダイレクトにかつ、確実に得られる「学校連絡メール」も保護者には役立っているとの評価が高い（177 人、52 %）。「子どもとの会話」は 183 人（54 %）が選んだ。子どもの飾らない言葉の端々にこそ、学校の生の様子が現れると考える保護者が多いだろうと考察できる。

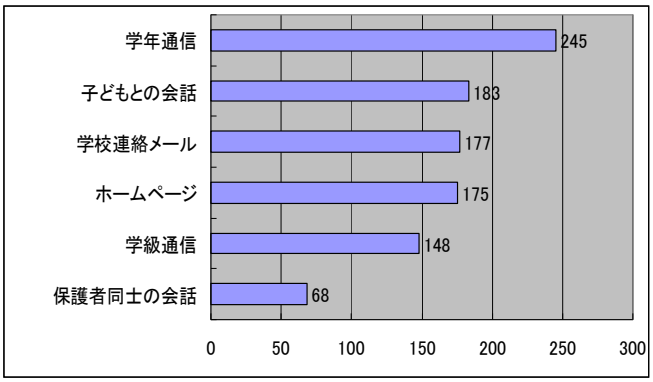


図-10　東中を知るために役に立っていると思うもの

イ　ホームページ閲覧の目的と効果（ホームページを見ると回答した保護者のみ）

「ホームページがどんなことに役立っていますか」との質問（複数回答可）に対しては、図-11 のように全体の半数以上にあたる 188 人が、「学校やクラスの様子・雰囲気などを知る」ことを選んだ。この設問の前に「ホームページをどんな目的で利用しますか」との質問をしたが、回答は図-11 に示すものとほぼ同様であった。

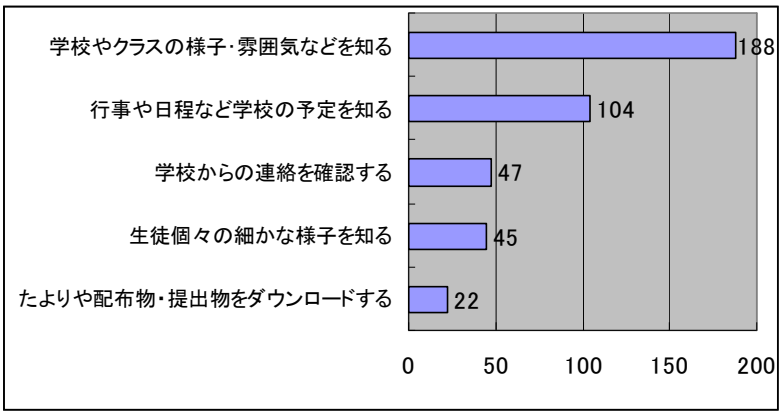


図-11　ホームページがどんなことに役立っていますか

ウ　「学校日記」に対する評価（ホームページを見ると回答した保護者のみ）

職員が交替で日々記事作成に努力している「学校記事」に対する意識を 4 段階の尺度評価で回答を求めたところ、図-12 のような結果が出た。われわれが記事を作成する上で配慮をしている 4 つの項目のいずれにも、「とてもそう思う」「どちらかといえばそう思う」で 9 割を超えた。

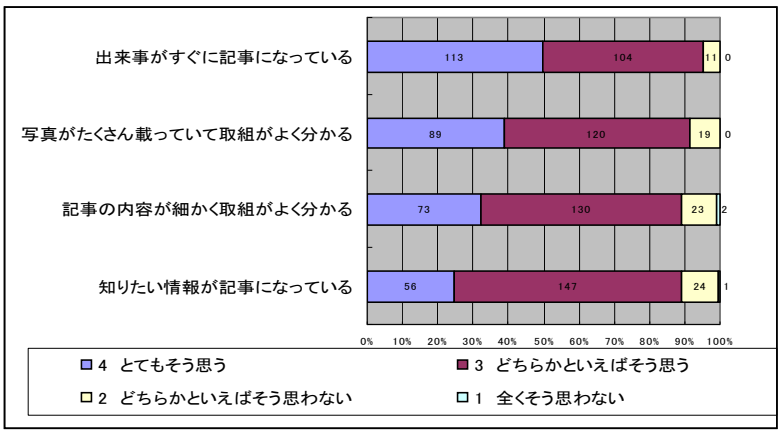


図-12　「学校日記」に対する評価

エ　総合的な解釈

今回のアンケートのすべての項目について、回答どうしの相関関係を調べたところ、図-11 に示す「学校やクラスの様子・雰囲気を知る」の項目と、図-12 の 4 項目は統計上有

意な強い相関があることが認められた(図-12 の項目の上から順に r=.771,r=.751,r=.746,r=.749 すべて p<.005)。すなわち、学校の様子や雰囲気を知りたいとする保護者にとって、本校の速報性・ビジュアル性を生かしたホームページは高評価されているということである。

これらの結果を総合的に分析すると、保護者の意識の中では、学校や担当教師のねがいや連絡など公式な情報を得る手段としては、定期的に発行されている通信物が優位にあると考えられる。ホームページに期待されていることは、その特性を生かして行事などの出来事があった際、すぐにその様子や結果を把握することや、写真などを通して雰囲気を感じ取ったりできる内容であると考えられる。本校の「学校日記」の記事作成での実践は有効であると解釈できる。

③学校全体に対する評価について

ホームページを見る、見ないにかかわらず、図-13 の 8 項目について 4 段階の尺度評価で回答を求めた。ホームページを「見る」群と「見ない」群との間の、差の検定を行ったが、特に有意差は認められなかった。どの項目も一様に好意的な評価を得た。そもそもホームページが唯一絶対の広報手段であることを導くための調査ではなく、ホームページを含む学校の様々な取組が評価されての総合的な評価であるので、この結果には満足できる。

図-14 に示すとおり「学校に協力したいと思う」の項目については、「見る」群と「見ない」群での回答に若干の違いが見られた。F 検定を通してこの 2 群の回答の散らばりについて検定を行ったところ、5 %水準で帰無仮説が棄却でき、有意差が認められた(表-4)。すなわち、ホームページを「見る」群の方が、「協力したい」に関して「そう思う」割合が有意に多いことが分かった。もともと関心が高く協力的な人がホームページを見ているのか、ホームページの影響で協力性を高めたのかは明らかにはならないが、どちらにせよ「ポジティブループ」のサイクルの一環であり、本校の取組が十分に機能していることがデータからも明らかになった。

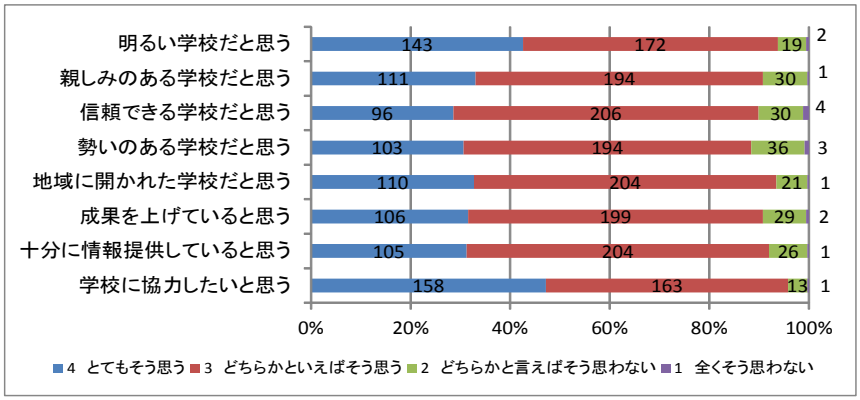


図-13 東中に対するイメージ（ホームページを見ない人の回答も含む）

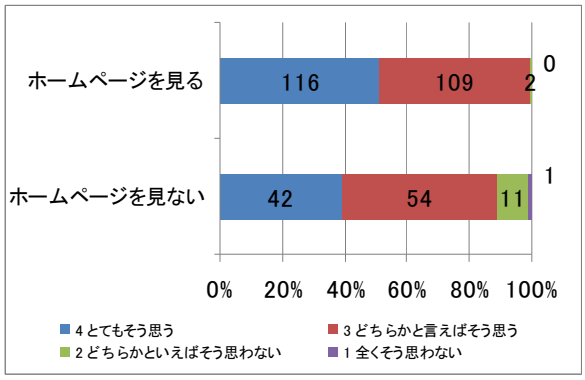


図-14 「学校に協力したいと思う」の回答

	見ない群	見る群
平 均	3.209091	3.456522
分 散	0.643953	0.423866
観測数	110	230
自由度	109	229
分散比	1.519239	
P(F=<f) 片側	0.004497	
F 境界値 片側	1.302215	

表-4 F検定「学校に協力したい」
ホームページを「見る」群と「見ない」群の差

（２）自由記述欄より

アンケートの最後に、意見・提言などの自由記述欄を設けたところ、表-5 のような記述があった。

- 生徒の活躍している様子。こちらも元気がもらえます。絵画とかも見てみたいです。(1 年男子母)
- 時間をできる限りとって、今後はホームページを拝見したいと思います。(1 年女子母)
- 十分充実した内容だと思います。(1 年女子母)
- 毎日 HP を観て学校の取組や子供達の様子もとても分かりやすく、保護者にとってとても役に立っていると思います。(1 年男子母)
- 細かく記事を載せてもらっているので楽しみにしています。他の学年の学年通信も見られるので役に立っています。(1 年男子母)
- 小学校の親子もよく見ていると聞いているので、東中に入学する前に学校の様子がわかってとても良いと思います。(1 年男子母)
- ほとんどホームページを観ていなかったのでこれからは学校の様子や子供達の様子を知るためにホームページを活用したいと思いました。(2 年女子母)
- 科学部や自然環境部の取組がよく分かり、学校での子供の様子が分かってよかったです。(2 年女子母)
- いつも対応が早く、安心して子どもを通わせられます。(3 年女子母)
- 今後も期待し、鑑賞させていただきます。(3 年男子母)
- 学校行事や大会等がリアルタイムで HP にのっているので大変楽しみにしている。また、子供が頑張っている様子がわかってとてもうれしい。(3 年女子母)
- ホームページ、毎回楽しみにみさせてもらっています。ホームページからも東中の活気が伝わってきて、親も頑張ろうという気持ちになります。いつもありがとうございます。宜しくお願いします。(3 年男子母)

表-5　アンケート自由記述欄の意見

このほか、提言として部活動のページを充実してほしいとの意見が複数あった。部活動のページについて、生徒の授業作品を活用する予定であったが、CMS 上では、授業で扱っている HTML（Hyper Text Markup Language）が動作せず、また、HTML で作成したページをアップロードするＷｅｂサーバが確保できていないなめ、対策が頓挫したままである。アクセス統計を見ても、部活動のページを見ている人は非常に多く、早急に対応をしたい。

７．まとめと今後の課題

「ポジティブループ」の形成を通して、保護者・地域住民との良好な関係の構築と学校への信頼感・協力心をいっそう高めるために、学校ホームページの活性化に取り組み、ページ内容の充実、毎日更新、独自の発展的活用などに努力したところ、アクセス数の急増を達成し、学校に対する保護者の意識がきわめて好意的になっているなどの成果を得た。

こうした成果は、「学校日記」の記事作成など、職員の日々の努力の積み重ねによってもたらされた。地味な記事の積み重ねではあるが、そうして努力する職員の姿勢こそが、外部透明性を高め、学校の評価・評判を紡ぐことにつながっていると考えられる。学校改善の最初の一歩は、まず学校・職員が変わることからが肝心であることを実証したのだ。これこそ「ポジティブループ」の理念の実現である。

今後は、部活動のページの充実など、保護者のニーズにいっそう応えるなどの改善を施していきたい。

〈参考資料等〉

1）文部科学省（平成 22 年）「学校評価ガイドライン〔平成 22 年改訂〕」p.37
2）文部科学省（平成 26 年）「平成２５年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001055112&cycode=0（政府統計）
3）,4）豊福晋平「積極的情報開示と外部評価による学校改善」（2005）
5）本校のホームページアクセス数は、全ページのアクセス数を計上する方式である。
6）国際大学グローバル･コミュニケーション･センター「これからはじめる学校広報ガイド」p.35